

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

5.21

渡邊一正がおくる新時代の幕開けを彩る名曲たち

今回の「平日の午後のコンサート」は、新元号に変わって最初に行われる東京フィルの主催公演。レジデント・コンダクター、渡邊一正の指揮で、心新たな門出に似合う華やいだ音楽が披露されます。

4月の定期演奏会では、首席指揮者のバッティストーニが『戴冠式』など即位にちなんだ作品を聴かせましたが、新時代に入った5月に演奏されるのは、その気分を明るく盛り上げてくれる名曲たち。幕開けを壮麗に彩るヘンデルの『王宮の花火の音楽』、明朗なフレーズを2人のソリストが仲睦まじく奏でるモーツァルトの2台のピアノのための協奏曲、そして新年によく演奏される名作、ドヴォルザークが新天地アメリカで綴った交響曲『新世界より』と、快活さや前進性を備えた音楽が続きます。

ダイナミックなサウンドに加えて、人気ピアニスト・仲道郁代と、ピアノの腕前にも定評ある渡邊一正のデュオも大きな見どころ。新時代を祝う豊穡な音楽に、耳目ともども浸りましょう。



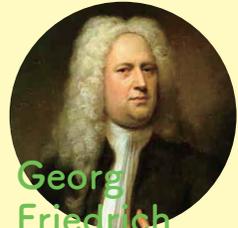
©上野隆文

5.21

オープニングを壮麗に飾る ヘンデルの『王宮の花火の音楽』

1曲目は、ドイツに生まれたバロック音楽の巨匠**ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル**(1685-1759)の『王宮の花火の音楽』より序曲。ヘンデルは、イタリア等で活躍後の1710年代にイギリスへ渡り、1727年当地に帰化しました。彼のもう1つの有名曲『水上の音楽』は1717年など数回に亘るイギリス国王の舟遊びのために書かれていましたが、『王宮の花火の音楽』は1749年というかなり後の作品です。1748年オーストリア継承戦争(イギリスも巻き込んだ国際戦争)がアーヘン講和条約締結をもって終結。本作は、それを祝ってロンドンで開かれた花火大会のために作曲されました。

もともと野外で軍楽隊が演奏するために書かれた序曲は、オーボエ24、ホルン9、トランペット9、ファゴット12、コントラファゴット1、ティンパニ3対という驚異的な編成。もちろん今回は、通常のオーケストラ編成に沿った版で演奏されます。曲は、壮麗な序奏が長く続いた後、軽快な主部に入り、掛け合いを交えた大らかな音楽が華やかに展開されます。



Georg
Friedrich
Händel

モーツァルトが姉ナンネルと演奏するために 書いたといわれる充実作

おつぎは、現オーストリアのザルツブルクに生まれ、ウィーンで活躍した古典派の天才**ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト**(1756-1791)の**2台のピアノのための協奏曲**。5歳違いの姉ナンネルと演奏するために書かれたとみられている作品です。ナンネル(愛称)ことマリア・アンナ・モーツァルト(1751-1829)は、かつて弟と一緒にヨーロッパ各地で神童ぶりを披露しました。後に父親が選んだ判事と結婚し、ザルツブルクで教育活動をするにとどまっていますが、この曲を弾くに十分な腕の持ち主であったのは確か。ただし問題は作曲年です。モーツァルト



Wolfgang
Amadeus
Mozart

は、1777年9月～79年1月にマンハイム・パリ旅行を行いました。これは、様々な音楽家との交流や各地の様式の吸収、同行した母の死や失恋などを通じて、作曲と人間形成の両面で成長を促した重要な旅として有名です。本作は、この旅行から戻って間もない1779年初頭の作、すなわち旅行の成果を反映した作品とされてきました。ところが近年、使用された五線紙の研究によって、旅行前の1775～77年頃の作との見方が浮上しています。結論は出ていませんが、モーツァルトは本作をウィーン移住後も演奏していますので、出来ばえに自信があったと思われますし、実際それまでの協奏曲に比べて一段と充実した音楽だけに、1779年説も捨てがたいところですよ。



マリア・アンナ・モーツァルト
(1762年頃)

曲自体は、明るく朗らかな気分が全体を支配し、数多くの旋律が登場する点がおもな特徴。2人の独奏者が同じ音型を交互になぞる場面が多いので、奏者の個性の違いや呼吸の合い方が明確にわかる作品でもあります。なお第1、第3楽章終盤にはモーツァルト自身によるカデンツァ（ソリストが無伴奏で技巧を披露する部分）が用意されています。

第1楽章：アレグロ。次々に新しい旋律が登場する快活な音楽。

第2楽章：アンダンテ。優美な主題に基づく緩徐楽章。中間部は短調に変わります。

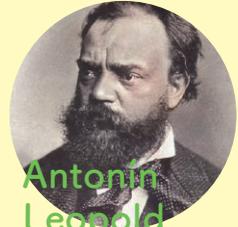
第3楽章：ロンド、アレグロ。明るく弾むフィナーレ。ピアノが目まぐるしく活躍します。



父レオポルトと姉ナンネルとともに演奏する7歳ごろのモーツァルト

5.21

アメリカへの共感と 母国への郷愁が融合した名作『新世界より』



Antonín
Leopold
Dvořák

後半は、チェコ国民楽派の大作家アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)の交響曲第9番『新世界より』。前作第8番から4年ぶりに作曲された彼の最後の交響曲であり、古今の全交響曲の中でも最上位の人気作です。

51歳を迎えた1892年9月、既に大家として国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史からの熱心な誘いに応じて渡米し、1895年4月まで同音楽院の院長を務めました。年俸は当時教えていたプラハ音楽院の3倍以上。ただし鉄道マニアのドヴォルザークは、アメリカの新型機関車を見たかったがゆえに承諾したともいわれています。そして彼は当地で、黒人霊歌や先住民の音楽を知り、これらの要素と故郷のチェコ・ボヘミア色を融合させた、弦楽四重奏曲『アメリカ』、チェロ協奏曲等の名作を残しました。その第1作が、1893年1～5月に作曲されたこの『新世界より』。同年12月カーネギー・ホールにて初演され、大成功を収めました。



ドヴォルザークの故郷ボヘミア(現在のチェコ共和国の西部・中部地方)のヴルタヴァ川

本作は、故郷ボヘミア音楽と同じ五音音階（大まかに言えば「ドレミソラ」の音階）を用いた現地音楽への共感、新世界アメリカ — 特にエネルギーに充ちたニューヨーク — の印象、母国への郷愁等が融合した音楽。いわば「新世界“より”」発信されたドヴォルザークの“アメリカ便り”ともいべき内容をもっています。

曲は、名旋律の宝庫です。中でも第2楽章のメイン主題は、後に歌詞が付けられ、「家路」等の名で普及。日本では下校や帰宅を促す音楽として用いられました。序奏部のホルンによる動機が全楽章に登場する点や、五音音階とシンコーペーションの多用も特徴。第4楽章の弱音の一打ちのみというシンバルの使用法も斬新です。なお第2、3楽章は、アメリカ先住民の英雄を扱った詩「ハイアワサの歌」から靈感を得たといわれていますが、作曲者自身「先住民やアメリカ民謡の精神を汲んで作曲しただけ」と語っているように、旋律の直接的な引用はなされていません。

第1楽章：アダージョ—アレグロ・モルト。 静々と始まる序奏に続いて主部に入り、序奏の動機に基づく第1主題、哀感を帯びた第2主題を軸に進行します。

第2楽章：ラルゴ。 郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏するおなじみの主題を中心とした主部に、美しくも切ない中間部が挟まれます。

第3楽章：スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ。 舞曲風の楽章。スラヴ風ともアメリカ先住民の音楽風ともとれる歯切れの良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれます。

第4楽章：アレグロ・コン・フォーコ。 力強く進むフィナーレ。行進曲調の第1主題が中心を成し、クラリネットが歌う優しい第2主題のほか、第1～3楽章の主題も顔を出します。最後は大きく盛り上がりながらも、管楽器の伸ばした音が弱まりながら終結。これはとても珍しいパターンです。

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。